

# 「南の世界」とって なぜ「非同盟」が緊急の課題なのか

ノントベコ・フレラ(Nontobeko Hlela)

[Looking Over the Horizon at Nonalignment and Peace \(thetricontinental.org\)](http://thetricontinental.org)

ウクライナ戦争を受け、国連総会でロシア非難決議に棄権した南アフリカをはじめとする国々は、国際的な激しい批判にさらされている。南アフリカでは、国内での批判は殊の外厳しく、明らかに人種差別的なものもしばしばある。この棄権は、南アフリカがロシアの侵略を支持しているからだとか、ロシアと南アフリカのエリートたちの腐敗した関係の現れか、あるいはかつてソ連が反アパルトヘイト闘争に与えた支援へのノスタルジアか、あるいはその両方によるものだとしばしば推測されている。

今回の場合、米国とその同盟国、あるいはロシアとの同盟を拒否することが、非同盟の原則的な立場であると同時に、地政学的現実に対する賢明な戦術的関与であり得るという認識はほとんどない。非同盟運動（NAM）の創設者であるユーゴスラビアのヨシップ・ブロズ・チトー大統領（当時）とインドのジャワハルラール・ネルー首相（当時）は、1954年12月22日に署名した共同声明で次のように述べた。「ブロックとの非同盟政策は...『中立』または『中立主義』ではなく、時に言われるように受動的なものでもない。それは、集団安全保障の基礎として集団的平和を目標とする、積極的、能動的、建設的な政策である」。

南の世界には世界の人口の80%以上が住んでいるが、その国々は「国際社会」の運営方法を決定する国際組織の意思決定から組織的に排除されている。何十年もの間、「南の世界」の国々は、国連が冷戦時代のゼロサムゲームから脱却するために改革を行うよう提唱してきた。1969年6月、チリの外務大臣だったガブリエル・バルデスは、ヘンリー・キッシンジャーから次のようにいわれたと報

告した。「南からは何も重要なことは生まれない。歴史が南で作られたことは一度もない。歴史の軸はモスクワから始まり、ボンに行き、そしてワシントンに渡り、東京へ行く。南で何が起ころうが、何の意味もない」。

その数年前の 1963 年 9 月 30 日、当時ナイジェリアの外相だったジャジャ・ワチュクは、国連第 18 回総会で次のように質問した。今もなお緊急の問いかけだ。「この国連は、アフリカ諸国が重要な機関で特定の事柄について意見を表明する権利もなく、ただ声を出すだけのメンバーになることを望んでいるのでしょうか。私たちは、これからもベランダ・ボーイであり続けるだけなのでしょうか。南半球の国々は、大人がルールを作り、世界が進むべき道を決めるのを、いまだに「ベランダ・ボーイ」のまま見ているのです。そして、期待に沿わないことをすると、説教され、叱られ続けています」。

今こそ、NAM を活性化させる時である。NAM は、グローバル・サウス（南の世界）の国々の指導者がエゴを捨て、地球規模で戦略を考え、その多大な人的資本、天然資源、技術的創意をより有効に活用すれば、成功することができる。南の世界には、世界第 2 位の経済大国である台頭する中国がある。また医療と技術革新の先進国であるインドも含まれる。人口が増加し、AI やクリーンエネルギー産業の発展に必要な天然資源が豊富にあるアフリカも含まれる。しかし、これらの資源はいまなお、遠く離れた資本の利益のために採掘され蓄積されている。その一方、アフリカや「南の世界」の大部分は未開発のままであり、何百万人もの人々が貧困の絶望から抜け出せないでいる。

再開する NAM には、本物の潜在力がある。米国がキューバやベネズエラのような国に対して行い、現在ロシアに対して行っている経済戦争に対して、その影響を和らげる新たな制度と緩衝器を構築するために時間をかけたらどうか。金融の自律性は死活的なのだ。

BRICS（ブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカ）は、メンバー国のため新開発銀行を設立した。南部アフリカ開発共同体（SADC）の 16 カ国には、南部アフリカ開発銀行がある。しかし、これらのプロジェクトに参加した国々の外貨準備金は、まだ米国や欧州の資本に留まっている。「南の世界」の指導者たち

は今こそ目を覚まし認識すべきだ。現在ロシアのような国に行われているような経済戦争が続けば、「南の世界」の弱小国には意味のある自治などありえない。

欧米が諸国を丸ごと破壊することを決定できることが明らかになった今こそ、政治、経済、外交政策のあり方を見直さなければならない。ロシアに対して作られた経済兵器は、ワシントンの路線に従わない気概のある他の国々に対しても使用できるようになる。

BRICS は多くの点で期待外れだったが、信条、文化、政治・経済体制に多くの違いを抱える「南の世界」の国々に、協力の道を開く場を提供した。各国は国連安保理で集団的に屈服するよう強い圧力をかけられたが、これを拒否した。このこと「南の世界」は永久に「ベランダ・ボーイ」(およびガール)であり続けるべきだとの思い込みを否定した心強い例である。

米国はロシアと中国に対する新たな冷戦を急速にエスカレートさせ、他の国々がその流れに乗ることを期待している。だから今、古い険悪な線に沿って世界を分割しようとするこの冷戦メンタリティを拒否することが急務となっている。

「南の世界」は、このような考え方を否定し、国際法はすべての国に尊重されなければならないと求めるべきだ。西側諸国が嫌いな国や同意できない国が破るときにだけ人権や国際法が引き合いに出されるのは、これらの概念を馬鹿にしているとしか言いようがない。「南の世界」の国々は、共に立ち上がって声を一つにすることによってのみ、国際問題において何らかの影響力を持ち、西洋の立場の単なるゴム印でありことをやめることができる。

非同盟運動に必要なのは、自信と大胆さであり、西側からの許可を求めないことである。NAMの指導者たちは、自分たちは国民に奉仕し、国民の利益を守るために存在することを理解し、「大物クラブ」の一員になる誘惑に負けて、問題に対する姿勢を揺るがさないようにしなければならない。そして常に心に留めておかなければならない。自分たちの運命を自分たちの手で切り開かない限り、永遠に食卓の下に置かれ、国民はグローバル経済で蓄積した富(その多くは南半球の搾取による)の残飯を食べるだけであることを。

(了)

ノントベコ・フレラ ケニアのナイロビにある南アフリカ共和国高等弁務団で一等書記官(政治担当)を務めた。現在は、三大陸社会調査研究所の南ア事務所研究員